

Title	概念プラグマティズムをめぐって
Author(s)	池吉, 琢磨
Citation	年報人間科学. 30 P.67-P.81
Issue Date	2009
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11916
DOI	10.18910/11916
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

概念プラグマティズムをめぐる

池吉 琢磨

〈要旨〉

J. フォーダーは、二〇〇四年の論文において、概念所有についての言語哲学や心の哲学の見解は全くの誤りだった、という大胆な主張を行った。本論文では、概念プラグマティズムと彼が呼ぶ二〇世紀的見解がどのようなものであるかを整理した上で、フォーダーの概念プラグマティズム批判の妥当性の検討を行う。

本論文の前半では、フォーダーによる概念プラグマティズムの説明を整理し、この見解の根底にあるとされる基本テーゼを明確にする(第二節)。そのテーゼによると、人がある概念を所有するための必要条件是、その概念を他のものから分類できること(分類条件)、そして、その概念から適切な推論を引き出せること(推論条件)のふたつに尽きるという。続いて、フォーダーによる概念プラグマティズム批判の論点を整理してゆく(第三節)。彼によると、概念プラグマティズムの基本テーゼは悪性の循環なしには説明できないという。

本論文の後半では、概念プラグマティズムの基本テーゼが、フォーダーが

指摘するような循環性をもたらさないことを、認知科学の知見を踏まえて論じてゆく(第四節)。最終的に、私は概念プラグマティズムがもつとされる基本テーゼは依然として擁護可能であることを論じるつもりである。

キーワード

ジェリー・フォーダー、概念プラグマティズム、概念所有、認知、志向性

1. はじめに

ジェリー・アラン・フォード(J. A. Fodor, 1935-)は、心の哲学や認知科学について数多くの著作を出版し続けているアメリカの哲学者である。また、彼は心のモジュール性や思考の言語(language of thought) についての仮説の提唱者として、そして意味の全体論やコネクショニズムに対する批判者としてよく知られている。

フォードは、一九九二年にE. ルポアと共に『意味の全体論』(Fodor & Lepore (1992))を公刊し、大きな反響を呼んだ。その書は、意味の全体論(holism)の妥当性を徹底的に検証したものだ。意味の全体論とは、言語全体、理論全体、もしくは信念体系全体だけが本当は意味を持つのであり、それより小さな単位(語や文、仮説、予測、思考など)の意味は派生的であるにすぎない、とする説のことである(Cf. Fodor & Lepore (1992) 序文)。この見解は、語の意味は文脈の中で確定されるという直観に基づいている。これに対してフォードらは、意味の全体論は依然として確認されていない、という診断を下したのである。

『意味の全体論』の公刊後、フォードは意味の全体論に代わる見解として意味論的原子論を再度提示している(Fodor (1994))。この見解によると、語の意味はその指示対象であり、両者の間には法的ないし情報論的な因果関係が成り立っていることになる。たとえば、「猫」という語が猫を意味するためには、「猫」が猫について

の情報伝えるとき、そしてそのときに限られ、更に、「猫」が猫についての情報を伝えるのは、『猫が「猫」を引き起こす』という因果関係が法的であるとき、そしてそのときに限られることになる。

もちろん、この見解の妥当性についても意味の全体論と同様に議論がある⁽¹⁾。従って、少なくとも現時点において、意味論的原子論が意味の全体論に取って代わることはないように思われた。しかし、二〇〇四年に発表した論文(Fodor (2004a))において、フォードは極めてラディカルな主張を行った。それは、概念所有(concept possession)についての言語哲学や心の哲学の二〇世紀の見解は全くの誤りだった、というものである。「概念プラグマティズム(conceptual pragmatism)」と呼ぶこの見解は、意味の全体論とほぼ同型の構造をもっており、意味の全体論の支持者として彼が挙げた哲学者たちの多くが、概念プラグマティズムの支持者として再び挙げられている。そのため、もしこの論文における彼の主張が正しいなら、『意味の全体論』において「依然として確認されていない」とされた意味の全体論は、最終的に拒否されることになるかもしれない。

本論文の目的は、フォードの概念プラグマティズム批判の妥当性を検討することにある。まず第二節において、フォードによる概念プラグマティズムの説明を整理し、この見解の根底にあるとされる基本テーゼを明確にする。そのテーゼによると、人がある概念を所有するための必要条件は、その概念を他のものから分類できること(分類条件)、そして、その概念から適切な推論を引き出せること(推論条件)のふたつに尽きるといふ。続く第三節では、フォー

ダーによる概念プラグマティズム批判の論点を整理してゆく。フォードはこの論文の中で三つの種類の反論を提示しているが、このうちふたつは『意味の全体論』以来、繰り返し議論されてきたものであり、この論文における新たな論点は見られない。本論文では、新たな反論として提示された、概念プラグマティズムの基本テーゼは悪性の循環なしには説明できない、という指摘について検討してゆく。そして第四節では、概念プラグマティズムの基本テーゼが、フォードが指摘するような循環性をもたらさないことを、認知科学の知見を踏まえて論じてゆく。最終的に、私は概念プラグマティズムがもつとされる基本テーゼは依然として擁護可能であることを論じるつもりである⁽²⁾。

2. 概念プラグマティズムの概要

フォードによると、二〇世紀の言語／心の哲学における特徴的な学説として、概念所有についての次のような考えがあったという。それは、「概念所有とはある種の、ディスポジショナルな認知的条件である」(Fodor (2004a) p.29) というものである。ディスポジショナルな認知的条件は、ある種の knowing-that なし knowing-how (或いはその両方) によって説明される。つまり、ある概念Cの所有は、Cが何を意味しているかを知っていること (knowing-that)、そして／或いは、Cをいかにして用いるかを知っていること (knowing-how)

から成るのである。この認知的条件は、本質的に規範的なものである。Cを知っていることは、Cについて正しく把握していることを、Cをいかにして用いるかを知っていることは、Cの使用という試みが適切に成功していることを、それぞれ含意する。このような考えに同意する立場が、概念プラグマティズムである⁽³⁾。もちろん、そこには幾つかのヴァリエーションがある。たとえば、概念所有を構成する knowing-how が純粋に行動の語彙に特定しうるか否かについては見解の対立が見られたし⁽⁴⁾、思考の社会的・個人関係の特徴を強調する哲学者たち(デューイ、クワイン、ワイトゲンシュタイン、デイヴィッドソンら)もいた。また、この立場は哲学者に特有のものではなく、認知科学の領域においても広く受け入れられていった。P.ブルームは認知科学におけるコンセンサスとして「xの意味を知っていることは、xであるものとxでないもの間の違いを見分けることができることを含んでいる」(Bloom (2000) p.18) を挙げているが、これは概念プラグマティズムの典型的見解だと言えるだろう。

フォードの目的は、この立場を拒否することにある。では、この立場の一体何が問題なのか。それは、概念プラグマティズムがもつ哲学的含意にある。その含意をより明確に理解するには、概念プラグマティズムの最も簡素なヴァージョン (a bare bones version of Concept Pragmatism、以下「BCP」) に注目するのが近道だろう。

このBCPは、概念プラグマティズムに属する人々が受け入れている基本テーゼだとフォードが考えるものである。そしてフォードは、BCPが明白に偽であることを示すことによって、概念プラグマテ

イズム全体を拒否しようと試みる。

BCPを特徴づけるに当たり、フォーダーは、概念所有のために必要な認知的条件をふたつの認知的能力——分類 (sorting) と推論 (infering) の能力に特定した。従って、BCPは次のように規定することができる (Ibid.p.33-4)。

【BCP】ある人が概念Cを所有していると言えるためには、次の

- (一) 二つの条件を満たしていなければならない。
- (二) 概念Cが適用されるものと、そうでないものとを分類する能力があること。
- (二) 概念Cを所有することによって、思考がもつ推論の幾つかを引き出す傾向にあること。

「三角形」の概念を例に考えてみよう⁽⁵⁾。「三角形」の概念は、「この三角形はあの三角形よりも大きい」、「幾つかの三角形は等角である」等々の思考の構成要素として生起する(しうる)が、これらの思考はいずれも「三角形」の概念を含蓄していると言えるだろう。このとき、「三角形」の概念をもっている人は、三角形であるものとそうでないものを分類できなければならない。円や四角形を「三角形」に分類する人や、直角二等辺三角形を「三角形」に分類しない人は、少なくとも我々と同じ「三角形」の概念を共有しているとは言えないだろう。また、「三角形」の概念を構成要素にもつ任意の思考からは、「三角形」を構成要素にもつというまさにその事実によ

って、幾つかの推論を引き出すことができる。たとえば、ある図形が三角形であることからは、その図形の内角の和は一八〇度であることが適切に推論できるだろう。

このBCP(ひいては概念プラグマティズム全体)がもつ哲学的含意について、フォーダーは次のように述べている。概念所有を認知的状態によって説明することは、存在論的順序と説明の順序の両方において、認知的状態を概念所有に先行させることを含意している (Ibid.p.29)。「三角形」の場合、三角形の分類ができることや、

三角形に関する適切な推論ができることが、「三角形」の概念の所有の確証に先立って可能でなければならない。また、このことは、認識論が存在論と説明の順序において心理学に先行することも意味する。というのも、BCPの認知的条件は、概念所有者の心理学的状態への直接的言及なしに検証可能だからである。もし、概念所有が本質的に認知的条件であるならば、心的状態は本質的に認知的評価を必要とするだろう (Ibid.p.31)。また、BCPは認識論が意味論にも先行していることを含意する。このことは、概念の把握がしばしば言語的表現の把握も含意することから帰結するという (Ibid.p.29)。

3. フォーダーによる概念プラグマティズム批判

フォーダーは、BCPとほんの僅かでも似ている概念所有のいかなる理論も、重大な反論に直面することになる、と指摘する。彼に言わせれば、概念所有の分析の中には、認知的なものは何も存在し

ないのである (Ibid.p.32)。フオーダーは三種類の反論を提示している、それぞれ「分析性」、「合成性」、「循環性」と題されている。分析性の反論は、BCPが意味の全体論や分子論を含意している限り、概念所有についての原理に基づいた説明を与えることができないことを、合成性の反論は、BCPが言語や思考の合成性と相容れないことを、それぞれ指摘している。これらはいずれも Fodor & Lepore (1992) などで表明されてきた論点の延長線上に位置づけられるが、この論文での新たな論点は特に見られない。循環性の反論は、概念所有における分類条件と推論条件は悪性の循環や後退なしには説明できないことを指摘する⁽⁶⁾。本論文では、この第三の反論を主題的に検討してゆく。

分類条件の問題

分類の制約から見てゆこう。まずフオーダーは、概念所有にとつて適切な種類の分類は、まさにその事実によって、外延的ではないと指摘する。たとえば「吠える動物」という概念はもっているが、「犬」の概念をもっていない人は、もし犬以外に吠える動物がいなければ、犬を犬以外の動物から適切に分類することができらるだろう。しかし、このことから、その人が「犬」の概念をもつことが帰結すると考えるのは直観に反している。反事実的条件（吠えるが犬ではない動物や、犬だが吠えない動物がいたならばどのように分類するか、など）まで考慮に入ればどうかと言うと、それでもうまくいきそうにない、とフオーダーは言う。というのも、必然的に同じ外

延をもつ概念でさえ、どちらも同じ概念を示していることを含意するとは限らないからである。たとえば「三角形」と「三辺形」、「2」と「唯一偶数の素数」は、いずれも必然的に同じ外延をもつが、前者の概念はもっているが後者の概念はもっていないということは十分ありうるだろう。それでは、概念所有にとつて適切な種類の分類とはどのような種類のものだろうか。ひとつの候補として考えられるのは、「概念的に同値の (conceptually equivalent) 概念に従った分類」(Ibid.p.39) である。このとき、ある概念Cを所有するための分類条件についての説明は、Cと同一ないし概念上同値であるような概念Cの所有条件を前提として見るように見える。そしてここに、真正の循環がある (Ibid.p.40)。「痛み」の概念を例に考えてみよう。この概念の二人称的な適用規準となるのは、恐らく相手の振る舞いだろう。従って、「痛み」の概念の所有条件は、少なくとも表面上は、特定の振る舞いの表出に従って、痛みを痛みでないものから分類することができるといえることになるだろう。しかし、「痛み」の概念は、「振る舞いによる痛みの表出」の概念と同値ではない。自分が感じる一人称的な痛みを、自身の振る舞いを観察することによって確証するというのは、明らかにナンセンスだろう。むしろ、我々はまず「痛み」の概念を一人称的に把握し、その後二人称的な「痛み」の概念の分類条件を獲得したと考える方が自然だろう。「振る舞いによる痛みの表出」の概念は、「痛み」の概念を前提にして初めて成り立つのである。それでは「痛み」の概念の所有条件は何かと問われた時、話は振り出しに戻ってしまう。そしてフオーダーは、「概念所

有に分類条件は存在しないか、もしあなたが好みなら、循環のある分類条件があるかのいずれかだろう」(Ibid.p.40)と結論づける。

推論条件の問題

推論条件を検討するに当たって、フォーダーは概念役割意味論 (conceptual role semantics) を取り上げる。概念役割意味論は、「表現の意味は言語(ないし理論)におけるその表現の役割である」というテーゼによって表される立場だが (Cf.Fodor & Lepore (1992) ch.6)、「表現の役割」の重要な核としてBCPの推論条件を位置づけることができるという⁽⁸⁾。しかし、推論条件が概念の所有条件であると考えられることには二つの問題がある。ひとつは、概念に適用される推論規則によって、概念内容がどのように決定されるのか、という問題。もうひとつは、推論規則の遵守が、概念をもつことの構成内容となるのどのようなようにしてか、という問題である。フォーダーは、これらの問題に答えることが期待される枠組みとして、推論条件の背後にある「暗黙の定義 (implicit definition)」(Fodor (2004a) p.40) を検討する。しかし彼によると、暗黙の定義は概念の所有条件の説明としてはうまくいかないという。以下、その論証を追ってゆこう。

まずフォーダーは、暗黙の定義についての最も説得的な事例として、論理定項を検討する。論理定項はそれ自体で指示を行わないため、「論理定項がなぜそれを行うことを意味するのか」や「論理定項を理解するとはどういうことか」についての説明は、すべて推論条件の説明によって行われることになる。連言 (conjunction) を例に

考えてみよう。フォーダーは、Peacocke (1992) において挙げられていた(真理関数的な「連言」の概念に含まれている暗黙の定義(ピーコックの言う「一般的形式 (general form) 」)を取り上げる (Cf. Fodor (2004a) p.41)。

【「連言」の概念の暗黙の定義】

「連言」とは、所有するためには、思考者が次のような原初的に説得的な (primitively compelling) 形式Iの事例であるような推論的推移を見出さなければならず、そしてその概念がIのような形式をもつが故に推論的推移を行わなければならないような概念Dがある。

I : p&q

pCq

p q → pCq

Iのうち、第一と第二のものは、連言を含む前提からそれを含まない結論への推論を確証し(「連言」の除去規則)、第三のものは、連言を含まない前提からそれを含む結論への推論を確証している(「連言」の導入規則)。これらの推論の妥当性は、すべて「連言」の概念によって与えられ、その推論が形式上妥当だと受け入れることもまた、「連言」の概念から帰結することになる。しかし、表現の導入規則と除去規則を提供することは、それ自体ではBCPや概念役割意味論を立証しない (Ibid.p.41)。というのも、Iは「独身男

(bachelor) は未婚の男性である」のような定義的表現の形式として見ることが出来るからである⁽⁹⁾。では、「連言」の概念の暗黙の定義が果たす本質的役割とは何か。それは、「連言」を含む議論や論証の妥当性に寄与することである。つまり、暗黙の定義は、どのような推論が論理的に受け入れ可能かを制約するのである。たとえば連言の一種である「そして (and)」の概念の暗黙の定義は、その概念が、宿主である文の真理条件に対して貢献するものを、次のような形で特定することを可能にする。

R: 「p そして q」の推論が妥当なのは、p そして q が共に真であるとき、そしてそのときに限る。

R は、暗黙の定義における I 内の C に「そして」を代入することによって得られる。そしてこの R は、「そして」の概念の意味として十分な内容をもっているように見える。しかし、これは「そして」の概念の所有条件ではない、とフォーダーは指摘する。生物がどのような概念を所有しているかは、その生物がどんな心的状態をもつかに依存するため、概念の所有条件における推論や分類は、その概念を受け入れる理由に関する心的状態の制約を受けることになるからである⁽¹⁰⁾。ある概念が論理的に正しい推論をもたらし「それは、それ自体では、概念を所有していると言えらるための十分な理由とはならないのである。従って、R は「そして」の概念の所有条件ではないし、そこから所有条件に対する制約を導出することもできない

(Ibid.p.42)。

フォーダーは更に進めて、「連言」の概念の暗黙の定義は、当の概念を既に所有していることを前提にしなければ理解できない、と指摘する。R をもう一度見てみよう。この公式化において二番目に生起している「そして」がメタ言語的であることは強調しておくべきだろう (Ibid.p.42)。つまり、R によって「そして」の概念に意味を与えることは、「そして」の概念をメタ言語的に使用可能であることを前提して初めて可能となるのである。そして今度は「そして」の概念のメタ言語的な所有条件について説明しなければならなくなり、後退が生じる⁽¹¹⁾。

4. 認知科学の知見を踏まえた、分類条件と推論条件の説明

フォーダーの概念プラグマティズム批判をめぐっては、Mind & Language 誌上で特集が生まれ、フォーダーとの間で議論の応酬がなされた。その中で、循環性の議論への批判としてはワイスコフらの議論 (Weiskopf & Bechtel (2004)) が挙げられる。彼らによると、分類条件と推論条件をめぐるフォーダーの議論は、おおむね次の流れで進んでいた。

【フォーダーの循環性の議論のスケッチ】

(一) 概念 C を所有していることは、C を分類することができること、そして推論 I_1 、 I_2 、…、 I_m を引き出せることに

依存する。

(二) 概念Cを分類することができ、推論 I_1 、 I_2 、…、 I_m を引き出せることは、C（或いはCと概念的に同値のもの）を所有していることに依存する。

このうち、(一)はBCPの前提であるため、BCPを擁護するためには(二)を拒否しなければならないように見える。そしてフォードは、概念Cの獲得が分類条件や推論条件とは独立に説明されない限り、この循環を断ち切ることができない、と考えた。これに対してワイスコフらは、フォードが「分類」「推論」の意味を不明瞭なままにしていることを批判した。彼らの論点は、分類や推論には「機械的」「志向的」というふたつの異なる段階があり、循環性の問題は、これら両方の段階からBCPの諸条件を捉えることによつて回避できる、というものであった。私の考えも、基本的に彼らの主張に沿ったものである。本論文では、認知科学の知見を踏まえて、ワイスコフらの議論では明らかにされていなかった、分類条件と推論条件の認知的基盤を明らかにしてゆく。そして、ワイスコフらが論じた機械的・志向的の区別が認知科学の研究成果と整合的であること、フォードの言う循環性はやはり回避可能であることを、積極的に論じてゆく。

分類条件の認知的過程

改めて、概念の分類条件について見てゆこう。BCPが概念の所

有条件として分類の能力を要請したのはなぜだろうか。恐らくそれは、対象を視覚や聴覚などを通じて認識するとき、我々は所有する概念に対応するように対象を分類できている筈だという直観をうまく反映しているからだろう。問題は、その分類の適切さがいかにして保証されているのか、である。フォードは、分類条件は、必然的に同じ外延をもつ概念を区別するためには「概念的に同値の概念に従った分類」でなければならないと論じた。しかし、このフォードの議論は勇み足だったように思われる。というのも、同じ外延をもつ概念をどのように扱うかという問題は、概念所有について考える上で無視できない重要性を持つように思われるからである。

必然的に同じ外延をもち、しかもどちらも把握可能な概念「正方形」と「等角のひし形」について考えてみよう。このとき、ある対象を正方形と見るか等角のひし形と見るかは、それらが同じ外延をもつ以上、全く任意であるように思われる。問題は、この直観を、ひとつの対象に対して同時に適用できる概念の数はたかだかひとつであるという経験的事実とどのように整合づけるかである⁽¹²⁾。ここで、話を整理するために、視覚的認知における区別に注目することが有益だろう。それは、入力された視覚情報から対象を構成する諸属性（形、色、奥行き、等々）が読み取られる段階（視覚）と、最終的に我々が対象を認識する段階（視覚的認知）の区別である⁽¹³⁾。この区別が我々の日常の直観を反映したものであることは、誤表象の事例から確認することができる。猫である対象Aを犬と誤って表象した事例を使って考えてみよう。まず、人は対象Aからの

視覚情報の入力からAについての属性情報を得る。この過程はいわば対象の認知にとって不要な要素（とその人の歴史の中で捉えられてきたもの）を捨象する過程であり、情報そのものが歪められてしまふ可能性は小さい⁽¹⁴⁾。この結果得られた属性情報の総体をA_mとしよう。ここで注意しなければならないのは、A_mはAを猫に分類するにも犬に分類するにも不十分だということである⁽¹⁵⁾。つまり、その人は本来ならば猫とも犬とも確定できない状況にもかかわらず、Aを犬と表象してしまったのである。一体何故だろうか。ひとつの考えは、視覚的認知の過程を一種のヒューリスティクスとして捉えるというものだろう⁽¹⁶⁾。特に視覚は自己に迫る危険を察知する最大の情報源であるため、視覚情報が乏しい中でも環境の変化に対して適応的な認知や行動を即座に取れるよう遺伝的・経験的に動機づけられていると考えられる⁽¹⁷⁾。一方、Aを犬と表象したことを撤回してAを猫と表象する際には、「犬かと思つたがよく見たら猫だった」といった具合に、表象を変更するに足る新たな属性情報（たとえばA_n）を得る必要があるだろう。従つて、Aを猫と表象した際に用いた属性情報（A_m⁺）は、犬と表象した際に用いた属性情報（A_n⁺）よりも豊かな内容をもつことになる。視覚的段階で得られた属性情報が異なる以上、視覚的認知において異なる判断（すなわち、犬ではなく猫と表象する）がなされるのは当然のことと言えるだろう。

このことを踏まえて、概念「正方形」と「等角のひし形」の事例に戻つてみよう。ある対象Bから得た属性情報（B_m）は、Bを正方

形と表象するか等角のひし形と表象するかを確定できないことは、誤表象の事例と変わらない。しかし、A_mは猫と分類するにも犬に分類するにも不十分な内容だったのに対し、B_mは、正方形にとつても等角のひし形にとつても十分な内容を既に持ち合わせている（B_mはBの忠実な写像である）。そのとき、視覚的認知においてどのように選択がなされるのだろうか。考えられるふたつの状況がある。ひとつは、何の脈絡もなくいきなりBが目の前に提示され、それが何かを問われる場合である。このとき、Bを正方形と見るかひし形と見るかは、その人が今までにB_mと類似の属性情報に対してどのように対応してきたかに影響を受けるだろう。但し、その影響は決定的なものではない。Bは正方形だと答えた人に対して「Bは等角のひし形でもある」と指摘すれば、その人は、初等幾何の知識があれば異論なくその見方を受け入れるだろう。いずれにせよ、文脈から切り離された状況でBを何として見るかを一意的に決めることはできない。もうひとつの状況は、Bが周囲の空間的・時間的文脈の中に関連する仕方と提示される場合である。たとえばBの面積を求める問題を出された場合、もしBの一边の長さが判明しているなら、Bを正方形として見るのが自然な反応だろう。しかし、判明しているのが対角線の長さであれば、Bを等角のひし形として見る（ひし形の面積の公式を適用する）ことになるだろう。この状況は、我々が対象にどの概念を適用するかを判断する際に、自分の置かれている文脈に合致するものを選択しようとする傾向にあることを示唆している⁽¹⁸⁾。

以上から、BCPの分類条件の背後にある認知的基盤を次のようにまとめることができる。まず、対象の認識にはふたつの種類の分類が関与していると考えられる。ひとつは、知覚的情報⁽¹⁹⁾から抽出された属性情報に基づく「機械的分類 (M-sorting)」²⁰。もうひとつは、属性情報以外の要素も考慮に入れた「志向的分類 (I-sorting)」である。機械的分類は、我々の識閾下で行われていて、通常は意識されることのない過程である⁽²⁰⁾。この段階での分類が不首尾に終わった場合、或いは意識的にその分類を考えようとする場合に志向的分類は行われるが、その判断には思考者が所有する当の概念だけでなく、その人がその時置かれている文脈も影響する。問題は、この文脈依存性をどのように説明するのだからである。ある対象Bの面積を求める状況で、Bに「正方形」と「等角のひし形」のどちらを割り当てて判断する場面に戻ってみよう。先に私は、Bの一边の長さが判明していれば「正方形」を、対角線の長さが判明していれば「等角のひし形」を割り当てるのが自然だろうと述べた。このときに遂行される概念の識別は、次のように説明される。まず、文脈情報から面積公式に関する記憶情報が喚起される。そして属性情報との照合によって使用すべき公式とそれに対応する図形概念が選択され、認識全体の斉合性が確保される。但し、後にその選択に基づく解答が間違っていたことが文脈情報から発覚すれば、その選択はやり直されることになる。このような認知過程の上に成り立つのが、志向的分類である。この説明は、それ自体ではなぜこの分類が志向的なのかについての説明にはなっていない。志向的分類が志向

的だと言えるのは、「なぜそのように分類したのか？」という問いに対して合理的説明を与えることが期待されるからだろう⁽²¹⁾。そしてこの説明は、認知過程において実現された斉合性と合致したものになるだろう。

それでは、BCPが要請する分類条件は機械的分類と志向的分類のどちらだろうか。もし前者のみであると考えるなら、分類条件は確かにフォードの言うような循環に陥るかもしれない。しかし、後者のみであると考えることは、上述の認知過程の性質上、不可能である⁽²²⁾。ワイスコフらが指摘するように、概念所有のためには両方の分類が必要だと考えるべきだろう (Weiskopf & Bechtel (2004) p.29)。従って、同じ外延をもつ別個の概念を識別する際に、フォードが言うような「概念的に同値の概念に従った分類」に訴えかける必要はない。

ところで、分類条件が機械的分類と志向的分類の両方を要請すると考えることは、BCPに代わる概念の所有条件に関するフォードの次のような主張とも合致する。

「人が何の概念をもっているかを決定するのは、その人が何を知っているか (know-how ないし that) ではない。それは、その人が何について考えることができるかなのである。」 (Fodor (2004a) p.31)

このように、概念に対して一定の志向的状态にあることが概念所

有の必要条件である、とフォオーダーは考えるが、これはまさに志向的分類が行うところのものである。私がフォオーダーと見解を異にするのは、概念所有の必要条件が、この志向的状态だけでは不十分だと考える点においてである。

推論条件の認知的過程

推論条件について見てゆこう。BCPにおける「推論」規則の把握は、一体どのような意味をもっているのだろうか。規則に従って推論する傾向にあることを意味するのか、それとも、規則を知っていること——規則を明示的に表現することができること——を意味するのか。まずはこの点を明らかにするところから始めよう (Cf. Weiskopf & Bechtel (2004) pp.52-55)。

前者の意味で規則の把握を理解した場合、たとえば、「pCq」という表象に応じて「p」と「q」を表象する傾向にあるためには、「C」——という形式の言明を感知するメカニズム——すなわち、暗黙の定義——が必要となる。そしてこのメカニズムの存在によって、Cに(概念「または(OR)」ではなく)概念「そして(AND)」を割り当てることが可能となる。フォオーダーが批判した推論条件は、まさにこのような趣旨のものだった。彼は、なぜ暗黙の定義がもたらす推論が話者に原初的な説得力 (primitively compelling) を感じさせるのか、と問い、その答えとして、「そして」という語が概念「そして」を表わすことを話者が把握する必要がある、と論じた。つまり、上述の暗黙の定義は、当の概念を既に把握していることを前提に機能

しているものであり、推論条件もまた循環に陥っているのである。

このとき、フォオーダーの言う規則の把握の意味は、前者から後者へとすり替わっていることに注意が必要である。フォオーダーは、暗黙の定義による推論が原初的な説得力をもつためには、どんな推論を受け入れるのかだけでなく、推論を受け入れる理由にも依存する、と主張した。そしてその理由には、話者が推論の前提と結論を理解していることが含まれるという (Cf. Fodor (2004a) p. 45)。しかし、暗黙の定義によって描き出そうとしているのは、我々の識閥下の水準で行われる推論のメカニズム——言わば機械的推論である。たとえば我々が「pそしてq」の表示から「p」と「q」を引き出すとき、自分の認知過程において暗黙の定義や「そして」の概念が適用されたこと(更には、どちらが先に適用されたのか)を認識することとは、まずない。従って、機械的推論が、果たして我々が合理的説明を構成するために行う推論と同じ意味で推論と呼べるかどうかは、説明を要する事柄なのである²³。とは言え、両者が全く独立の事柄というわけでもない。機械的推論の妥当性は、明示的な推論規則による検証を受けることによって、完全にではないが、保証される。逆に言えば、機械的推論はそれ自体では正しさを保証できないのかもしれない。この点について何がしかの主張を行うことは本論文の目的ではないため、これ以上の言及は避ける。ひとつだけ確かなのは、このような考えをフォオーダーは許容しえないだろう、ということである。意味論的原子論の支持者である彼にとつて、合理的説明において表わされた推論構造と全く同型の認知過程が、我々の内部

で実現していなければならないのかもしれない。しかし、意味論的原子論にコミットしない者にとって、このことは自明ではないのである。

それでは、BCPの推論条件はどのように理解されるのだろうか。規則の把握を前者の意味で理解すると、その推論実践を我々が（原初的に説得的であるとして）受け入れる理由が説明できない、というオーダーの指摘は、確かに正しい。しかし、その推論を受け入れる理由は、別の種類の推論によって——我々が論理学を通じて学んだ明示的な推論規則に従って検証によって——与えることができる。この推論は、機械的推論と対比して、志向的推論と呼ぶことができるかもしれない。オーダーは、これらの二つの推論を同語反復的に用いているように思われるが、両者を区別することで循環は回避できるのである。

5. 結論

BCPの分類条件と推論条件は、オーダーが主張するような循環を引き起こさない。本論文において、私はこのことを積極的に論じてきた。そして本論文の議論を通じて、BCPがオーダーの言うような哲学的含意をもつこと——すなわち、認識論が意味論や心理学に先行すること——もまた疑わしいことも示してきた。分類条件と推論条件を検討する中で登場した志向的分类や志向的推論は、

認識論よりむしろ意味論や心理学によって探求されるべき事柄だった。従って、認識論の意味論や心理学に対する優越性は、BCPを受け入れることから帰結しないのである。

もつとも、本論文で提示したBCPの諸条件の説明は、概念所有を認知的条件のみによって規定するという（オーダーによる）概念プラグマティズムの規定からは逸脱しているかもしれない。その意味では、本論文は概念プラグマティズム全体を擁護するものではない。しかし、BCPの規定は、たとえそれが非認知的な要素を含むとしても、概念所有のための必要条件として妥当なものである。このことが確認されたなら、本論文の目的は達せられたと言えるだろう。

注

(1) 意味論的原子論が抱える難点としてしばしば取り上げられるのが、語や表象の意味を確定する際に生じる誤表象の問題（選言問題）である。我々は、たとえば縄を蛇と見間違えたり、暗闇の中にいる犬を猫と見間違えたりすることがあるが、意味論的原子論はこの現象を説明する際に困難を抱えていることが指摘されている。

(2) なお、本論文は、日本科学哲学会第四〇回大会（二〇〇七年 中央大学）において行った同名の研究発表の内容を加筆・修正したものである。

(3) この規範性の要求が、概念プラグマティズムが意味の全体論と同型の構造をもつことを暗示している。というのも、ある概念の使用が適切であるか否かは、その概念の使用者が置かれた文脈によって異なりうるからである。

(4) オーダーはこの問いに肯定的に答える人物としてクワインとスキナ

ーを、否定的に答える人物としてライル、ワイトゲンシュタイン、デイヴィッドソンを挙げている (Ibid. p. 30)。

(5) Cf. Ibid. pp. 33-4. 但し、事例は「木」から「三角形」に変えてある。

(6) この議論の基本的アイデアも Fodor & Lepore (1992) ch. 6 において見られる。

(7) もっとも、この「痛み」の事例が十分な説得力をもつかどうかには疑問が残る。「痛み」の概念の一人称帰属と二人称ないし三人称帰属が本質的に異なるとしても、我々が「痛み」を概念として把握する際には両方の帰属が必要ないように思われるからである。たとえば、子どもの痛みの本能的表出(泣き叫ぶなど)に対して、大人が「痛かったね」「痛いの痛いの飛んでけー」などといった、「痛い」という言語表現を重ね合わせる。それによって、子供は痛みの感覚に対して「痛い」と言うことを習得する。このように、「痛み」の概念の一人称帰属を習得するためには、他者による「痛み」の概念の帰属(二人称ないし三人称帰属)が不可欠であるように思われる。フォーダーの議論は、痛みの本能的表出と「痛み」の概念の把握を混同しているように思われる。

(8) 概念役割意味論は、『意味の全体論』において、意味の全体論を擁護する立場として取り上げられていた。このことから、意味の全体論が概念プラグマティズムと密接に関連していることを窺い知ることができる。

(9) この場合、「未婚の男性」↓「独身男」は「独身男」の導入規則となり、「独身男」↓「未婚の男性」は「独身男」の除去規則となるだろう (Ibid. p. 41)。

(10) このことは概念プラグマティズムだけでなく自分にとっても真である、とフォーダーは言う。但し、プラグマティストにとって重要な心的状態が「知っている／信じている」などであるのに対し、フォーダーに

とって重要なのは「〜について考える」「〜と考える」などであるという点は異なっている (Ibid. p. 42, fn. 17)。

(11) この議論は、意味論はつましく (modest) あってはならず内容豊富 (full-blooded) でなければならぬとするダメットの議論と親和的である(従って、フォーダーはダメットと同様の批判を受けることになるだろう)。Dummett (1993)、飯田 (2002) を参照。

(12) このことは、ワイトゲンシュタインのアスペクトの気づきをめぐる議論が示唆するところのものである (Cf. Wittgenstein (1953) 第II部xi)。

(13) 本発表における視覚的認知に関する議論は第六六回日本哲学会(二〇〇七年 千葉大学)における「一般研究発表「アスペクト盲にアナロジーはできるのか?」の内容に基づいている。

(14) もちろん、捨象された要素が対象の正確な認識にとって不可欠であるような可能性は存在する。そしてそのような事態を経験した場合、以後その人は類似の事例においてその要素を捨象せずに認識するようになるだろう。このことは、視覚覚の過程においても適応(経験的一般化)が生じうることを示しているように思われる。

(15) もし A_m が概念「犬」と共通する属性を多く備えているなら、 A は犬そっくりな猫ということになり、 A を犬と表象したことはそれなりの理由があることになるだろう。また、 A_m が「犬」と全く共通項をもたないのに A を犬と表象したならば、その人は認知機能に深刻な問題を抱えていることになるだろう (A_m が猫を表象するのに十分な場合も同様である)。いずれにせよ、これは誤表象の事例ではない。

(16) この見解は、知覚や認知における錯誤のメカニズムに関する研究(下條 (1999)) を基にしてゐる。

(17) もしその人が犬嫌いであれば、このプロセスが「犬」の概念を構成しうる属性に対して敏感に機能する、ということとは十分にありうるだろう。

- (18) もちろん、この選択が結果的に誤りだったと判明することはありうる。この誤表象ならぬ誤文脈の問題は、誤表象とほぼ同型の枠組みで十分説明できるだろう。
- (19) 本論文では視覚情報を例に論じたが、このメカニズムは他の知覚にも拡張することができる。たとえば、ある対象が犬か猫かを識別する際に、その対象の鳴き声は視覚情報以上に決定的な役割を果たすだろう。
- (20) 更に言えば、この分類は知覚的情報と属性の基本的構成要素に関する記憶情報との間の類似性に基づく判断（アナロジー）であり、志向的
分類が受ける論理的制約とは本質的に異なる制約の下で機能している
と思われる。
- (21) ここで要請される合理性は、「どこかでそう聞いたからだ」といった
ようなごく弱いものでも構わない。それが説得的か否かは別問題であ
る。
- (22) フォーダー自身は、ワイスコフらへの応答の中で、志向的
分類がもつ
志向性から分類能力や推論能力が生じると主張している（Cf. Fodor
(2004b), p. 100）。しかし、本論文における認知過程の説明に従うならば、
機械的
分類のみが生起することはありえない。
- (23) 私は、認知過程における推論実践と、合理的説明を構成するための推
論実践は区別すべきだと考える。たとえば、何が事実かを考え出す発
見的思考における推論実践は非・表象的でありうるし、また、推論の
進行がしばしば非・軌道的でありうることを、私は池吉・中山（2007）
の中で論じた。

参考文献

- Bloom, P. (2000) *How Children Learn the Meaning of Words*, MIT Press.
Dunnet, M. (1993) *The Seas of Language*, Oxford UP.

- Fodor, J. (1994) *The Elm and the Expert*, MIT Press.
—— (2004a) “Having Concepts: A Brief Refutation of the Twentieth Century,”
Mind & Language, vol. 19, No. 1, pp. 29-47.
—— (2004b) “Reply to Commentators,” *Mind & Language*, vol. 19, No. 1, pp.
99-112.
Fodor, J. & Lepore, E. (1992) *Holism: A Shopper's Guide*, Blackwell. (フォーダー・
ルポア (1997) 柴田正良 (訳) 『意味の全体論：ホーリズム、そのお買
い物ガイド』産業図書)
飯田隆 (2002) 『言語哲学大全 IV：真理と意味』勁草書房
池吉琢磨・中山康雄 (2007) 「思考についての哲学的探究：ギルバート・ラ
イルの観点から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 33 巻, pp.
21-38.
Peacocke, C. (1992) *A Study of Concepts*, MIT Press.
下條信輔 (1999) 『意識』とは何だろうか』講談社現代新書
Weiskopf, D. A. & Bechtel, W. (2004) “Remarks on Fodor on Having Concepts,”
Mind & Language, vol. 19, No. 1, pp. 48-56.
Witgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigations*, Blackwell. (ウィットゲンシュ
タイン (1995) 黒崎宏 (訳・解説) 『ウィットゲンシュタイン』哲学探究』
第 II 部読解』産業図書)

Considering “Concept Pragmatism”

IKEYOSHI Takuma

In 2004, J. Fodor insisted that a characteristic doctrine of twentieth century philosophy of mind/language was absolutely false. He called the doctrine “Concept Pragmatism,” according to which to have the concept C is to be able to distinguish Cs from non-Cs and/or to recognize the validity of certain C-involving inferences. In this paper, I examine the validity of his argument and make clear the epistemic foundation of Concept Pragmatism.

In the first half of the paper, I explain an outline of Concept Pragmatism (section 2) and Fodor’s criticism of it (section 3). According to him, Concept Pragmatism implies that epistemic states are prior to concept possession, both in the ontological order and in the order of explanation.

In the latter half of the paper, I examine two conditions which Concept Pragmatism requires to possess a concept. And I argue that these conditions depend on certain epistemic foundation and that Fodor’s criticism is not valid to some points (section 4).

Key Words : Jerry Fodor, Concept Pragmatism, concept possession, epistemic foundation, intentionality